

2021年12月5日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

イザヤ書 29：1～5

ルカによる福音書 19：41～44

「平和への道」

＜イエスさまの涙＞

イエスさまが、涙を流されました。

苦しみを受け、十字架に架かられるために、エルサレムへいよいよ入ろうとしておられるイエスさまです。子ろばに乗って、まことの平和の王として、すべての人々を救うために来られた、イエスさまです。そのイエスさまが、泣かれた。

イエスさまが泣いたという場面は、ルカによる福音書ではたった一か所、ここだけです。 そうであるなら、わたしたちはこのイエスさまの涙に、どれだけの思いが込められているのか。どうしてイエスさまが、この場面で泣かれたのか。そのことを、よく心に留めなければならないと思います。

＜エルサレムのために＞

イエスさまの涙は、これからエルサレムで十字架の死へと向かわれる、ご自分の苦しみや痛みを思う涙、恐れによる涙ではありません。

41 節には、「エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、」とあります。その都のために。イエスさまは、エルサレムのために、泣かれたのです。

エルサレムとは、神さまがお選びになった神の民イスラエルの、中心的な都です。立派なエルサレム神殿が建ち、人々の心の拠り所となっている都です。旧約聖書の時代から、神の民イスラエルが、神さまと共に、その長い歴史を歩んできた都であり、民はそこに建てられた神殿を中心に、神さまを礼拝して歩んできました。

そしていよいよ、このエルサレムに、神の御子イエスさまが、今、神さまの救いを実現するために、平和の王として来られたのです。今こそ、神の民が、そして世のすべての人が、イエスさまを救い主として迎えるべきとき。まことの平和の王として来られたイエスさまを、受け入れるべき時が来たのです。

神さまは、神さまに背くすべての人々が、神さまに立ち帰り、神さまの民として、神さまの恵みのご支配の中を生きるようにと願っておられます。

そのためにこそ、神さまはイエスさまを遣わし、すべての人の罪を赦し、すべての人に神さまとの和解を与えようとしておられるのです。

ところが、エルサレムの人々は、イエスさまがどのようなお方で、何のために来られたのかをまったく理解していません。このイエスさまを遣わして下さった神さまのご計画や、御心を、まったく知ろうとしないのです。イエスさまは言われました。42節「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。」

イエスさまが涙を流されたのは、エルサレムが、「平和への道をわきまえていない」ということに対してです。平和の王が、今まさに来られ、平和への道が、今まさに目の前に開かれているのに、人々にはそれが見えていないことを、嘆かれたのです。

平和への道とは、神さまとの平和のことです。神さまとの和解を与えられる道です。

人々は、罪と死に支配された、滅びに至る道を歩んでいます。しかし、イエスさまがご自分の十字架の死によって罪の赦しを与え、神さまの許で、神さまの恵みのご支配に生きる道を与えて下さる。この神さまの救いの恵みを頂くことこそ、「平和への道」なのです。

しかし、その道を拓き、示し、導くために来て下さったイエスさまを、ある人々は、神さまから遣わされた救い主と認めず、敵意、殺意を抱き、反発し、陥れようとしています。

またある人々は、救い主とは、平和の王とは、武力によってすべての国々を蹴散らし、ローマ帝国の支配を打ち破り、自分たちのイスラエル王国を地上に再建する、力強い王であるとの理想を抱き、イエスさまを、自分の思い通りの救い主に仕立てようとしています。

そのように人々の目は覆われてしまって、今、目の前に拓かれている平和の道を、今、目の前に来られた平和の王イエスさまを、正しく見つめることが出来ていません。

イエスさまによって実現する神さまの救いの約束は、遠い昔から、これらの民に、確かな約束として、希望として、告げ知らされてきました。また、イエスさまご自身も、そのことを人々に教え、御業によって示し、神の国へと招いて来られました。

それなのに、まったくそれが受け止められていない。神さまへ心を向ける者がいない。差し出されている救いを、受け取ろうとする者がいない。平和をもたらして下さるイエスさまを、迎えようとする者がいない。

イエスさまは、そのようなエルサレムを見つめ、涙を流されたのです。

### ＜滅びの予告＞

そしてイエスさまは、こう言われました。43節「やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

この御言葉の一部には、今日読まれたイザヤ書29章が引用されています。このイザヤ書は、神の民が、神さまに背いたことによって、エルサレムが滅ぼされることを警告している箇所です。

実際に、イエスさまの十字架の出来事から数十年後の紀元70年に、この地でユダヤ戦争が起こりました。その時エルサレムは、ローマ軍に包囲され、陥落し、神殿は打ち壊されてしまったのです。こうして、警告は実現したのだ、と解釈されることもあります。

力で支配する王を求め、自分たちに敵対する国々を滅ぼし、王国を打ち立て、戦争で勝利することによって与えられる平和を求めていた人々は、まことの平和を得ることは出来なかったのです。

しかしこれは、エルサレム神殿の崩壊の予告、警告というだけではなかったでしょう。イエスさまが語られたのは、神さまに造られた者でありながら、神さまに背こうとする、すべての者への警告なのではないでしょうか。

神さまに背くとは、命をお造りになり、養い、守り、導かれる神さまから、離れて行くということです。神さまを中心に歩むことをやめ、自己中心的に歩むということです。神さまを王とするのではなく、神さまを退けて、自分が自分の王として歩むということです。

それは当然、命の源である神さまから離れ、滅びへと向かって行く歩みです。また、自己中心的な思いは互いにぶつかり合い、隣人との争い、競争、裁き合いを引き起こします。

神さまは、ご自分が命を与える、守り、養い、愛しておられる人々が、そのように、神さまに背き、反逆することに対して、大きな悲しみを抱かれます。そして、激しく怒られます。

誰でも、まことの平和、つまり、神さまに対する罪の赦しを求める、神さまの恵みのご支配の許で、共に生きてゆく平和を求めるのでなければ、わたしたちもまた滅びへと向かっているのです。そのような歩みは、神さまの御前で裁かれるべき、滅ぼされるべき歩みなのです。

### ＜まことの平和＞

しかし、驚くべきことに。神さまは、そんなわたしたちが、今からでも悔い改めて、神さまの御許に帰ってくることを、忍耐しつつ、期待しつつ、ずっと待って下さっているのです。

神さまが望んでおられることは、背いたわたしたちが、自業自得で、苦しんで滅びていくことではありません。

神さまが望んで下さったのは、わたしたちが、自分は神さまのものである、ということを知り、神さまを愛し、また神さまに愛されている自分を愛し、そして、共に神さまに愛されている隣人を愛していくことです。わたしたちが、神の国、神のご支配に生きる者となることです。

そして、わたしたちにとっては、こうして神さまと共にあることこそ、救いであり、本当の平和なのです。そして、この神との平和の中でこそ、神さまに支えられてこそ、わたしたちは隣人とも、はじめて、本当の平和を築いていくことが出来るのです。

イエスさまは、この神さまとの平和を与えるために来られました。神さまから離れ、敵対するわたしたちを滅ぼすためではなく、神さまの御許に立ち帰らせて、神さまの平和のご支

配の中に生きる者とするために、来てくださったのです。それが、神さまの御心です。

そのためにイエスさまは、わたしたちが受けるべき裁きを、神さまの怒りを、滅びの死を、身代わりになって引き受けて下さるのです。そのために、イエスさまは今エルサレムに来られ、十字架の死へと向かっておられるのです。その涙のゆえに、イエスさまは御自分の命を、滅びるべきわたしたちのために、与えて下さるのです。

エルサレムでの十字架の出来事は、神の御子イエスさまが、ご自分の命によって、わたしたちの罪を贖って下さった出来事です。そうして、神さまの方から、わたしたちが悔い改めるよりも先に、罪の赦しを宣言して下さったのです。

だからわたしたちは、裁きを恐れて、怒りを恐れて、滅ぼされるかも知れないとビクビクしながら神さまの顔色を窺ったり、神さまの許へ行くことをためらう必要は一切ありません。

もし、わたしたちが神さまに立ち帰りたいと願うなら、赦しを願うなら、神さまの許で生きたいと望むなら、神さまは、イエスさまによる罪の贖いのゆえに。十字架のゆえに。いつでも、無条件に、喜んで、わたしたちを迎えて入れ、受け入れて下さるのです。

あの、放蕩息子を迎えた父親のように、神さまは、わたしたちに走り寄り、抱きしめ、祝宴を設け、大喜びで迎えて下さるのです。

わたしたちは、何を差し出す必要もありません。そもそも、わたしたちが自分の命を差し出したって、罪を赦していただくには、到底足りないです。神さまの愛を裏切り、蔑ろにした罪。神さまの御心に背いた罪。神さまの思いを無視し、恵みを投げ捨てた罪。それは、どんなことをしても、赦されないほどの罪です。

しかし、神さまとの平和をわたしたちにもたらすために来て下さった、神の御子イエスさまが。平和の王であるイエスさまが。ご自分の十字架の死によって、わたしたちの罪を贖い、赦しを与え、神さまの御許へ帰る道を、拓いて下さったのです。

ですからわたしたちは、神さまの御許こそ、わたしがいるべき場所であること。そして、平和の王である神の御子イエスさまこそ、十字架に架けられたイエスさまこそ、わたしの王、わたしの救い主であることを、認めなければなりません。

この方をこそ受け入れ、この方の御言葉にこそ従うべきなのです。そして、わたしたちは神さまの御許で、まことの平和に生きるようにと、招かれているのです。

### ＜神の訪れ＞

イエスさまは、涙して言われました。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。」「それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかつたからである。」

エルサレムが、平和への道をわきまえていなかつた、というのは、神の訪れてくださる時をわきまえなかつた、ということです。

神の訪れ。救いのために、平和のために、救い主が今、エルサレムを訪れておられるのです。神の御子イエスさまが、今、人々の許に来ておられるのです。

この方を、心からお迎えし、まことの王として、平和の王として、わたしの王として、受け入れることが、「平和の道をわきまえる」ということです。今こそ、その時なのです。

しかし、エルサレムは、その時をわきまえなかつた。神の訪れを受け入れなかつた。そして、用意された平和への道を見過ごしている。神さまが差し出された救いを、投げ捨てるようなことをしている。そして、争いへ、苦しみへ、滅びへと向かつてゐる。

イエスさまは、このようなエルサレムのために、涙されました。

そして、もちろんこのイエスさまの涙は、この2000年前の、エルサレムのためだけに流されたものではありません。今この時を生きるわたしたちのためにも、流された涙です。

イエスさまは、わたしたちすべての者を救うために、来られたお方です。

今、この聖書の御言葉を聞いているわたしたちの許にも、今、神さまは訪れて下さっています。イエスさまは、来て下さっています。平和の王は、今、わたしたちの王として、迎えられるのを待つておられます。

イエスさまの十字架の血によって開かれた、罪の赦しの道。イエスさまの復活によって開かれた、命への道。それは、御言葉が語られる度に、わたしたちに示されています。御言葉は、ここに救いがある、ここに平和があると、告げています。御言葉が語られる時こそ、神さまが訪れておられる時なのです。

わたしたちが、目を開き、耳を開き、心を開いて、イエスさまをまことの王として、わたしの王として迎えるべき時は、今この時です。

自分が自分の王であるかのように、自分の思いを支配している自分を退け、わたしたちは神さまの思いにこそ、神さまの愛にこそ、支配される者となりたいのです。

イエスさまに服すること、従うこととは、決して、自分の意志を失うことや、何かを我慢したり、束縛されたりすることではありません。わたしたちの王は、ご自分の命を、わたしのために与えて下さるような王なのです。わたしを愛し抜き、わたしを生かすためなら、涙を流し、どのような苦しみも耐え忍んで下さる王なのです。この平和の王が、わたしの王でいて下さること。この王の恵みのご支配の中に、安心して憩うことができること。

わたしたちが、神さまのご支配に生きるとは、何よりも平安で、何よりも自由で、何よりも喜びに満ちていることなのです。

この後、イエスさまを受け入れ洗礼を受けた者は、聖餐の恵みに与ります。

これは、わたしたちが今すでに、この神の恵みのご支配に生きる者とされていること、天の喜びの祝宴に招かれていることを示す、地上で与る確かなしるしです。また、イエスさまの十字架で裂かれた体と流された血によって、わたしたちの罪が赦され、イエスさまの許で新しい命に生かされていること。この平和の王の体に、わたしたちが一つに結ばれていることを味わい知るための、確かなしるしです。

今この時わたしたちは、心からこの恵みを、イエスさまを、受け取りたいのです。

そしてどうか、一人でも多くの者が、この平和の王の訪れを受け入れ、喜んでお迎えし、平和への道を共に歩む者となることが出来ますように。祈ります。

### 【お祈り】天の父なる神さま

あなたに背き、逆らい、滅びるべきわたしたちを、それでも愛して下さり、憐れんで下さり、まことの平和に与らせるために、御子イエスさまを遣わして下さったことを、心から感謝いたします。

イエスさまの命が、罪の赦しが、平和への道が、わたしたちの目の前に差し出されているのに。平和の王は、今来ておられるのに。わたしたちは心を頑なにし、自分が自分の王であるかのように振る舞い、イエスさまを退け、受け入れようとしない者であることを、どうかお赦し下さい。イエスさまが、わたしたちを憐れんで流して下さった涙と、わたしたちを救うために流して下さった血を、どうか今はっきりと見つめ、イエスさまをわたしの王として、救い主として、迎える者とならせて下さい。

聖霊なる神さまが、どうか一人一人の心を神さまに向け、イエスさまを救い主と信じ、わたしの平和の王と信じる信仰を、与えて下さい。

今日は聖餐の恵みに与ります。目に見えるしるしによって、目に見えないあなたの救いの恵みを、まことに確かにされる時です。このことを通して、わたしたちの信仰を励まし、強めて下さい。また一人でも多くの者が、この恵みの食卓に、共に着くことが出来ますように。

このお祈りをイエスさまの御名によって祈ります。アーメン